佳作

葛尾村を元気にしよう

福島県葛尾村立葛尾中学校
３年　伊藤　愛佳

「牧場のシンフォニーという名前はどうですか。」

葛尾村を盛り上げるために、家庭科の授業で商品開発を行った。そこで私が考えたゼリーの名前が「牧場のシンフォニー」だ。家庭科の先生に提案すると、絶賛してくださり、ちょっと得意げになった。それは、葛尾村を表現した３層のゼリーで一番下がミルク味で、真ん中が小豆、葛尾村の牧場を表す。そして一番上が青い色素を混ぜたゼリーで、それは青空を表現し、特産品である「凍み餅」をトッピングした。「いちご」も添えて、葛尾村のここ数年の名所となっている「クリムゾンクローバー」も感じられるようにした。

私は、小学４年生のときに葛尾村に引っ越してきた。それまではただ何となく過ごしてきただけだった。自然溢れるこの村の魅力に気が付きながらも、村に対してそこまでの愛着も感じていなかった。しかし、中学３年生になり、進路選択に迫られた今、葛尾村の役に立ちたいという気持ちが芽生え始めた。そんなとき、職場体験が実施され、葛尾村役場の広報課の仕事を一日体験することになった。担当の先﨑さんは、広報の仕事を通して、村民に村のことを知ってもらうことで貢献できる仕事だと教えてくださった。また、取材先でたくさんの出会いがあり、村の良さをより一層感じられると笑顔で答えてくれた。

それを聞いて「葛尾村に住んでいる私が将来、この村をアピールしないでどうする。何かやらなくては」という感情が私の中に走った。この先ではなくても今から私ができることもあるはずだと思い、考えてみることにした。

そこで家庭科の商品開発をすることになったのだ。葛尾村の特産品をふんだんに使ったメニューを考えることが楽しかった。販売は実現しないかもしれないが、こんなものがあったら食べに来てくれるかもしれないとあれこれ思案した。その結果、開発したものが「牧場のシンフォニー」だ。葛尾村の特産品を存分に使い、表現したゼリーになった。

葛尾村は 11 年前の東日本大震災の影響で帰還困難区域となった。避難指示解除と同時に私は葛尾村に移り住んだ。今現在、葛尾村に帰村している人口は 331 人だ。広大な大地に緑いっぱいで空気が美味しい村なのにこれしか人が住んでいない。朝起きると鳥のさえずりや太陽がきらきらと反射する様子はまるで物語の中の世界のように美しい。季節の移り変わりの中で小さな命が生まれ、すくすくと育っていることが分かる瞬間だ。４月、校庭に咲き乱れた桜にたく

さんのヒヨドリが集まっていたこともあった。葛尾村の良いところを探して、私たちが伝えていかなければならない。この魅力をどう伝えるか、何があったら葛尾村に遊びに来てくれるのかを考えた。人口が少ない葛尾村に集客するために必要なものは何か。

総合的な学習の時間に、村の復興交流館「あぜりあ」へ学習成果物を展示しに行った。昨年の７月から授業の成果物を月に１回程度貼り替え、展示している。コロナ禍の中、人と人とが直接会えなくても村の方々を元気にしたいと、全校生徒でアイデアを出し合った企画だ。家庭科新聞や、書道作品、絵手紙、手芸品を飾っている。「あぜりあ」を訪れた方々、村民の皆さんに授業で学習した内容を発表できる場ができて、私たちにとって嬉しい活動だ。

また、シュレッダーごみで再生紙を作りしおりにしたもの、たんぽぽの綿毛のドライフラワーのインテリア小物、エコバッグなど授業で作ったものを低価格で販売している。売上金を葛尾村に寄付するという目的もあるからだ。葛尾村の力に少しでもなったらいいと考えた。

福島民報新聞への投書も継続して行っている。自分たちの活動や意見を自由に発信できる場だ。県内の方々に葛尾村で頑張っていることを知ってもらいたいという思いから国語の授業で取り組んでいる。

こうした積み重ねで葛尾村が元気になったら光栄だ。こんな小さな村でも、全校生徒が３名でも、力を合わせたら何か大きいことができる自信がある。私たちが取り組んできたものは実際に形として大きなものとなった。これから先、いろいろな壁にぶち当たるときがあると思う。でも私が村のために築き上げてきたことを思い出して乗り越えていきたい。まずは受験だ。強い心を持って受験勉強に励んでいこう。将来はどうなっているか予想はつかないが、私は今できることを頑張っているよと伝えたい。村のため、みんなのため、自分のために、できることを一歩一歩歩んでいるよ、と。だから自信を持って進んでほしい。未来のあなたなら大丈夫、迷わず進もう。